保育の工夫

自然をテーマにした保育

小林名々子

夏休みも終って、再び幼稚園中が子どもたちの活気にあふれた空気で一ぱいになる頃、早くも庭のアオギリやお山の木々が落葉し始め、時おり、それを拾っている子どもの姿を見かけるようになった。芽生え始めた自然物への興味をもっと大きく伸してあげたい、それから未だ興味を感じていない人には興味を持つ契機を作ってあげたいものだ、と思って左のような保育案を立てた。

九月十九日

四才児（男児十八名・女児十八名）

登園

九・一〇　自由遊び

おちばひろいとその製作への自然導入

一〇・五〇　歌（木の葉）

木の葉についての簡単な話し合い。

一一・三〇　帰園

製作については、四才児も二学期に入ったので、共同製作とまではいかなくても、それに近い形すなわち、お友だちと一しょに一つの大きなものを楽しく作るよう導いて、後の共同製作への一段階になるように、と考慮した。しかし、必ずしも一つのものを一しょに作ることにはこだわらず、主眼はあくまでも自然物への興味と関心の芽をはぐくむことにおいた。

そして普段あまり製作への興味を持たない、またとかく目こぼしになりがちな子どもに特に気を配り、全部の人が何らかの形で主眼とするところに近づくようにしたいと考えた。

また十時五十分からの歌は、始めての曲であるが、憶えることよりも曲に合わせて動作するくらいにとどめ、おちばについて子どもたちとことばを交しながら、一日のまとめの意味を持たせたいと思った。

○準備

1. 模造紙に木の幹のみを描いて観察用ついたてに貼り、おちばをひろって来て皆でそれを貼るようにする。セロテープ、のり、クレオンを用意。木の枝を描き足す

のに、マジックインキも用意したかったが、あまりに幅広くなり過ぎると思い、クレオンのみにした。

2. 個人で製作する人の為に画用紙を用意する。

3. ひろって来たおちばが、おままごとやお店やさんにまで発展することをも望みながら、紙の空箱も数個用意しておく。

○ 経過

「お早うございます」と入ってくる子どもの顔も九時前後には数を増してくる。一人ひとりを視察しながら、今日一日、皆私の誘導にのってくれるだろうかと緊張が増す。つい立てに近寄って、しばらく眺めた後、「ナーンだ、木か」とつぶやいて行ってしまう男の人もあり、また「先生、これなーに？ アッ分った木でしょう。これどうするの？」など、皆一応は興味を示す。

「はっぱのついていない木じゃ可哀そうね皆で、はっぱをたくさんひろってきて大きな木にしましょうよ」

「こんなに大きく？」

「ええ、こんなに大きくね」と手を一杯に拡げてみせる。

〝先生、ひろってくる！〟

「一しょにお山へ行って」など、次第に誘導にのってきてくれることを嬉しく思う。一しょにお山へ行きたかったがまだ登園しない人を待って保育室にとどまる。庭への出入口で、自動車に乗り込んだまま、走らせるでもなく遊びに入っていないTちゃんとNちゃんに

「おちば自動車にしてたくさんひろって来てちょうだい」と誘いかけると

〝おちば自動車?! ワッ行こうか〟

と二人顔を見合わせて、出発する。

一方、先刻お山へ行った子どもは「先生とって来た」と一人はアオギリばかりを、一人はたった一枚を、また一人はわずかに散り始めたいちょうを持って来た。大きなアオギリを貼ろうとしているのは普段あまり製作に興味を持たないGちゃん。もう落ちてしまったはっぱだと云いながら、根元の方に貼りつけている男の子もいる。

庭へ出て女の子数人と、美しく紅葉して散っているモチの葉や黄色いヒラヒラした葉を探す。それと一しょに外で遊んでいる子どもたちを見廻ると、おちば自動車の二人も、またはっぱをひろいに外へ飛び出して行った男の子たちも、すっかり他の遊びに夢中になってしまっている。

室内に入って、今ひろって来た葉を持ってつく然としている女の子たちに「これとこれは同じ形ね」と同種類のかたまりを作ってみせる。

しかし自分のひろってきた葉は、さっさと自分のポケットにしまい込んでしまう。これでは、おままごともお店やさんごっこも無理だと感じてその方は断念してしまった。

ふと気がつくと、お当番さんのMちゃんが画用紙にクレオンで木を描き、その枝に、ひろって来た葉をいくつか貼っている。お

ちばの色が美しい。自発的に始めたMちゃんは、普段扱いにくいと思っていただけにその意欲が嬉しく感じられて、一生懸命ほめてあげた。もう一人男の子がMちゃんの隣に座って真似をしながら楽しそうにクレオンを使っている。また隣の机では女の子四人が、やはりMちゃんに刺激されて、ポケットにしまい込んだ葉を取り出して、一人は真赤なモチの葉ばかりを大体きちんと並べているし、またSちゃんは赤、緑、黄の葉を画面一杯に散らしている。K子ちゃんは茶色のけやきの葉でお人形さんを形造り、下方には一列に敷きつめて道を作っている。緑や黄のいちょうや赤いモチを、ただ勝手に貼りつけているだけの人もいる。

それだけでも今は良いと思い「いろいろなはっぱが並ばったのね」と声をかけたが、今から考えるとやはりそこには先生の上手な助言があるべきだったのだと反省している。

一〇時三〇分頃の状態

大きな幹には数本の小枝が描き足され、未だ緑色をしているアオギリや、つたや、いちょうが大分貼られている。しかし、まだまだ私の望むところまでには達していない。一方個人製作も、できたのは六枚、これではほんの一部の子どもしか参加しなかったことになる。大部分の子どもは、こちらの誘導に一応はのってくれたように思うが、その後の指導が足りなかった為か、各々の遊びを楽しんでいる。思うように進展してくれないというあせりで次第に落ち着きを失いながら次の行動の準備を始める。

十時五十分

ピアノの周囲に寄せた椅子に皆が落着くまで〝木の葉〟を弾く。全員がどうにか座った頃高音部で木の葉の散るようすを弾いてみた。

「これ何みたいかしら」

「先生、花火」「はなび、はなび」

と返事が返ってくる。再び弾くと「花火」の声の中に「はっぱ」という声が聴えてきた。それをとらえて

「そう、Kちゃんは、はっぱだと思ったんですって。今のははっぱさんがチラチラ木から落ちてくるところなのよ」

はなびだと感じる子どもに無理に木の葉だと思わせなくてはならない指導のまずさを恥しく思った。

どんな色をしたはっぱがあるかきいてみる。

「夏のお休みの前には、やっぱり赤や黄色い色していたかしら」

「していない。緑色だった」

「そうね、それじゃどうして黄色や赤い色になったんだと思う？」

「……」

「夏休みが終ってだんだん寒くなってくるでしょう。はっぱさんたちはね、黄や赤や茶色の洋服を着ると、とても暖かくなるんですって。だから、寒くなると緑色の洋服をやめて赤や黄色や茶色になるんですって、いいわね。」

次に皆で座ったままはっぱになる。
「誰かはっぱになってチラチラ散ってみましょう」
「先生、ぼくなる」
と、製作には全然参加しなかったK夫ちゃんがチラチラしながら椅子のまわりを走ってくる。続いて女の子もなる。
しかし、次第に隣りの人とふざけたり、おしゃべりをしたり、立ち上って喧嘩する人が多くなってくる。時計を見ると帰園時間が迫っているのでお帰りの仕度に移ってピアノを離れた。仕度が出来たところで、製作物を見せながら今日一日のしめくくりをする。
「今日しなかった人はまた明日すればいいわ。はっぱばかりでなく、かたつむりでも、何でもいいわね」
「先生、何でも良いの？　じゃ みみずでも？」
「いいわね」と返事しながら苦笑を禁じえなかった。ご挨拶をして、担任の先生にお任せする。

○反省

(1)この計画は果して子どもたちに適していたか。
自然への興味が子ども自身の中から湧き起ってくるほど、自然界の変化はまだじゅうぶん材料を提供してくれなかった。すなわち、時期が少し早かったのではないだろうか。
また皆と一しょに一つの製作をすることは、自然物を材料にしては、少し難しかったらしい。
例えば、自分のひろってきた葉をポケットにしまいこんでしまう女の子たちや、大きな紙には興味を示さないのに、自分の画用紙には同じことを一人で立派にやり遂げていたMちゃんなどが、明瞭にこのことを示していると思う。
(2)保育内容の時間の組み方が良くできていない為、一日の流れの中に盛り上りがなく、ずるずると終ってしまった。歌の時に騒然となってしまった原因の一半は、ここにあるのではないだろうか。
(3)一人ひとりの子どもの指導に力を注ぎすぎた為全体に対する配慮がなされず、一組全体をまとめていく力に欠けていた。
(4)準備が粗雑であったこと
模造紙は、おちばが貼られた時の色彩を考えて茶色いものを使ったが、暗い感じになってしまった。これは白にすべきだった。また、つい立てに貼るよりも、黒板に貼った方が良かった。絵も幹だけでなく、子どもたちが本当にやりたいなと思うような楽しい雰囲気を持ったものでなければいけなかった。
以上があらましであるが、振り返ってみると、たったこれだけしかできなかったということをたいへん残念に思う。しかし、本当に良い勉強になったと思っている。こうした経験を積み重ねていくことによって、次第に良い保育ができるようになるのであろう。(お茶の水女子大学保育実習生)